

平成28年10月、中国の北京大学において、  
中華人民共和国文化部元副部長の劉徳有氏と川勝平太静岡県知事が  
“「ことば」異文化の扉を開く鍵”をテーマに語り合った。

異文化との出会い

**司会** 劉先生が日本語と出会ったのはいつ、どんなきっかけだったのですか。

**劉氏** 私は1931年、中国・大連の生まれです。その頃の大連は日本の統治下にあり、私は日本人が経営する幼稚園に入りました。それが日本語との出会いです。通訳の仕事をはじめたのは1954年頃からです。約10年間雑誌の仕事をする傍ら、たびたび毛沢東主席や周恩来総理など、中国指導者の通訳を担当しました。その後、中華人民共和国の文化部では日本を含めた世界各国との文化交流の仕事に携わりました。

**司会** 川勝知事は静岡県知事になる前、学者として北京大学で講演をされたことがあるそうですね。久しぶりに北京大学に来て、どのように感じていましたか。

**知事** まず、北京大学には日本語をよく知る学者、大学院生、学生がたくさんいることに驚きました。初めて北京大学に来た1990年代は、街の中に自

**知事** 私が留学したイギリスのオックスフォード大学はカレッジの集合体ですが、カレッジでは先生も学生も一緒に生活していました。私は、さまざまな国の人たちと6人で居間と風呂と台所を共有していました。例えば、イスラエルとイラン、イラクは、国同士の仲は決して良くなかったのですが、大学の中ではみな友達でした。大学というのは人々を平和に共存させるコミュニティであることを知りました。大学生活を通して平和共存はありうるという認識を得たのです。

**司会** 日本文化の特徴はどんなところにあると思いますか。

**劉氏** 中国と日本の文化には共通点がたくさんありますが、異文化であると言ってもいいと思うこともたくさんあります。例えば、俳句は中国人にとって難解です。省略が多すぎ、限られた17音で刹那的な感動や意象を捉えて表現することとは難しいですね。また、季節の果たす役割を的確に把握することも苦手です。例えば、正岡子規の名句「柿食へば 鐘が

転車があふれていました。が、今は全部自動車で、高級車も駐車しており、劇的な発展を遂げています。また、今日は、日本語での対談を聞きに来てくださる方が、こんなにも大勢いらっしやることに驚いています。

**司会** さて、静岡県のキャッチフレーズは「富国徳」です。劉徳有先生のお名前にも関係がありそうですが、このキャッチフレーズには、どんな意味が込められているのですか。

**知事** 富士山の「富士」という字を見てください。「富」の下の字「土」は、徳のある立派な人物、学徳のある人物のことで

す。富士を四字熟語にしたのが「富国徳」です。四字熟語にするとは日本では分かりやすいのです。戦前の日本は「富国強兵」をスローガンに掲げ、富を軍事力に使用しましたが、これは誤りでした。富は人を立派にすることに使わなくてはなりません。富は立派な人物によってつくり出さなければならぬということ。「富国徳」としました。富は、使い方が大切です。富をつくることは貧困を克服するので大切ですが、その富をどう使うのか、人を生かすために使うべきです。徳がある人間をつくることとが本来の富の使い方である、

中華人民共和国  
文化部元副部長  
劉徳有氏  
りゅう とくゆう



静岡県知事  
かわかつ へいた  
川勝平太



# 「ことば」異文化の扉を開く鍵

## 言葉と文化交流で友好関係の強化を

これが静岡県の県是である「富国徳」です。

**劉氏** 知事がキャッチフレーズの由来についてお話になりましたが、国が豊かになって、人間が豊かになっても徳を忘れてはいけないということ。伺い、大変感激いたしました。私の徳有という名前は、塾の先生につけてもらったと両親から聞きました。出典は論語です。「徳は孤ならず、必ず隣有り」の徳と有をとって徳有にしたそうです。

**司会** 今日のテーマ「異文化体験」について伺います。お2人は外国暮らしで異文化に触れた経験があります。異国の暮らしで印象的だったことを聞かせてください。

**劉氏** 私は中国貿易代表団で商談や交渉の通訳をしていましたが、一番困ったのは、日本人の言葉が曖昧で、主語がなかったり、意味をぼかしたりすることでした。例えば「その問題はあれでしてね、なんとかまい具合に」というわけにはいきませんか」という言葉は通訳泣かせでした。

鳴るなり 法隆寺」。中国の読者がこれを読んで疑問に思うのは、なぜ柿を食べたら法隆寺の鐘が鳴ったのか、リングゴではないのか、ということ。日本人なら、だんだん深まる奈良の秋の気配を感じ取って、連想を膨らませるに違いありませんが、中国の一般読者にそこまで理解を求めるのは無理だと思えます。

日本には歳時記があり、これを見ると、日本民族が風土に根ざした季語を大量に生み出したことが分かります。例えば春一番、菜種梅雨、土恋し、卯の花くだし、虎落笛等々枚挙にいとまがありません。このような民族色豊かな季語を中国語に訳すのはまさに至難の業です。豊富な季語は、日本文化を構成する重要な語彙群であると同時に、日本文化の大きな財産でもあると思います。

**司会** 知事は静岡の文化とはどのようなものだと考えていますか。

**知事** なんとと言っても、世界文化遺産の、日本のシンボル富士山です。富士山は、日本の真ん



中にあります。また、静岡は、京都と東京の真ん中にあります。京都は日本が中国に学んだ都市です。東京は欧米から学んだ都市です。中国から学んだ京都の文化と欧米から学んだ東京の文化が調和して、1つになるところ、それが静岡です。東西の文化に開かれ、和を大切にす

**文化の違いを乗り越え 相互理解へ**

**劉氏** 富士山は日本のシンボル

ら不満の声が上がりました。「どうして毎日冷や飯を食わせるんだ。我々は冷遇されるために来たのではない」と言うのです。温かい弁当を売っている店もありますが、日本では、弁当が冷たいのは当たり前です。しかし、中国では冷たいご飯は食べません。ですから、日本で冷たくあしらわれたと思ったのも無理はありません。結局、中国大使館が中に入って、卵入りのスープを1人にひとつずつ付けて、丸く収めたということがあります。このことから分かるように、お互いに相手を知ることが大事であり、また、知る努力をすることによって誤解も解かれると思います。異文化の交流を強化してこそ、相互理解と友好が強まっていきます。その意味で両国の文化交流をもっと盛んにすべきではないでしょうか。中国は静岡県とも頻りに文化交流を行っています。スポーツ交流も含めた文化交流が盛んです。今後この交流が知事の御指導の下、さらに盛んになるよう、心から期待

ルですが、同時に富士山は日本人の誇り、静岡県民の誇りであると思います。

静岡には三保松原という美しい松原があります。富士山の構成資産の1つとして世界文化遺産に登録されています。大変きれいなところで、美しい伝説「羽衣」もあります。それを聞いて私は中国の「天河配」という伝説を思い出しました。こんな話です。ある牛飼いの男が池のほとりに行くと、女性の服が木にかかっている。女性が水浴びをしている。男が着物を持ち去ろうとすると、女性に「返してください」と言われて返します。そして2人は結ばれ、子供が2人生まれます。しかし女性は天女だったので天に帰りま

す。その後、2人は毎年7月7日に天の川を渡って巡り合うという話です。日本にも織姫と彦星の伝説がありますね。どちらが影響したかは分かりませんが、中国と日本の間に文化交流というものが、自然に心を通い合って、非常に似かよったふたつの美しい物語が、両国に生まれたのではないかと思います。

**司会** 異文化交流の必要性についてはどう思いますか。

**知事** 異文化交流は平和をつくることにつながります。早稲田大学で私が教えた学生の1人が、北京大学に留学の機会を得て研鑽を積みました。そこですてきな中国人女性と出会い結婚し、幸せに暮らしていま

しています。

**司会** 異文化交流において言葉が果たす役割を聞かせてください。

**知事** 言葉は民族の最も大切な文化です。言葉を尊重することは相手の民族文化を尊重することになります。しかし、相手の言葉をマスターするのは容易ではありません。劉先生がおっしゃったように、相手の文化を理解することは本当に難しいと思います。言葉が通じると、理解が進み、友情をはぐくみます。これからも、静岡県民370万人は中国の友人を大事にしていくと約束します。

関係を見ますと、現在は新旧世代の交替期にあると思います。中日友好関係を深めるためには相互理解と相互信頼の増進が重要です。その中で言葉の果たす役割は実に大きいと思います。どうか日本語の学習に励み、日本文化への理解を深め、互いに信頼し、厳しい試練にも耐えうるような、しかも情に重きを置いた人間関係を築くことに努力されますよう、心から期待しています。相互不信をなくすには、まず相手を知ることが大事です。魯迅先生はこう言いました。「人類は互いに隔たりがなく、関心を寄せ合うことに越したことはなからう。しかもその最も平坦な道は文化芸術によって疎通を図ること、た



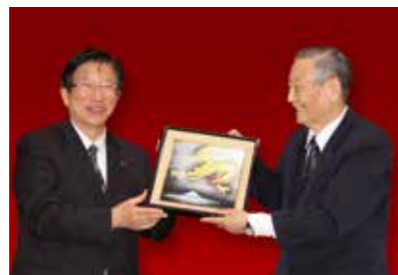
中華人民共和国文化部元副部長  
劉 徳有氏

1931年中国大連生まれ。日本文化研究者、ジャーナリスト、翻訳家。1952年北京へ、『人民中国』誌の翻訳・編集に携わる。1955年から64年まで毛沢東、周恩来、劉少奇ら要人の通訳。1964年から78年まで『光明日報』、新華社通信記者・首席記者として日本に15年滞在。1986年から96年まで中華人民共和国文化部副部長(副大臣に相当)。著書に『時は流れて』『戦後日語新探』など多数。翻訳書は『芋粥』(芥川龍之介)『不意の嘘』(大江健三郎)『祈禱』(有吉佐和子)『残像』(野間宏)など。



静岡県知事  
川勝 平太

1948年京都府京都市生まれ。1972年早稲田大学政治経済学部を卒業。1975年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了。1985年オックスフォード大学博士号取得。早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長を経て2009年より現職。著書に『日本文明と近代西洋』(NHKブックス)、『文明の海洋史観』(中公文庫)、『鎖国と資本主義』(藤原書店)など。



だそれだけである」。魯迅先生のこの言葉は、心と心の触れ合いを重んじる文化交流と学術交流の重要性を強調したものだ。私は理解しています。今後このような方向に向かって、お互いに、共にがんばりましょう。最後になりましたが、川勝知事はじめ、静岡県民の皆さん方のご幸福を心からお祈りいたします。